

映画上映

5月29日

PM 5:00 6番教室

「責め地獄」

「女は度胸」

「とめてくれるな、おっかさん」



「責め地獄」

春一レイエムの季節

FIN

春4月バクリ残され花に散る

つい先日、長年のつき合いだった友人が自殺した。郵便運配の関係でハガキの届いたのは、死後1週間ほど経過してのことであった。ちょうど『エロス+虐殺』を見終って帰ってくると、ハガキが2枚。そこには、あいつらしい独特な丸味を帯びた字で二枚に渡って詩が書いてある他には何も書いてなかった。

彼の死に様は長沢延子風に言うなら、『生きることはさびしいのだ／…雪に埋もれた私の上を／桜の花が散る時／友よ私はほほえんで／ながい旅にのぼろう』となるのだろう。世の中には自殺を嫌悪する健康な人種もあるようだが、そういう人種には、芥川の『死にたければいつでも死ぬからね。／ではためにやってみ給へ』というのがどのくらい重みを持っているのかわかるのだろうか。

しかし、彼(はくの友人)の死にはくらがほとんど反撥を感じないで、むしろほとんど無感動でいられるのは、藤村操や原口統三のように、言わずもがなのことを言っていないからだと思われる。全く、彼らはある意味で厭味だ。そこへ行くと奥浩平・岸上大作には何故かまだ、反撥を感じず無感動でいられる。はくの精神感覚では、藤村・原口・奥・岸上の間には幾ばくかの運庭があるように思われる。

『エロス+虐殺』の評で、磯田光一は『衣服に火をつけ、仮構の情念の燃焼を味わおうとする現代の男女の心には、もはや何もすることがないというニヒリズムが宿っている。』と書いているが、はくの友人はおそらく、『もはや何もすることがない』のに耐えきれなかったのだろう。実際ははくの世代には過去・現在・未来にわたって何もすることがないのだ。いやこれは現代の特性というよりむしろ、個人の、その人間の資質とでもいうべきものなのかも知れぬ。『さて、明日は春3月、何をやるか恋か革命か!』と『エロス+虐殺』で堺利彦は言うのだが、恋も革命ももはや、現実問題としてはいささかの興味も惹起しはしない。大杉はさらに、やはり『エロス+虐殺』で『失敗は無為に勝る』と言うが、はくらはもはや失敗の甘くほろ苦い感傷にひたれる程若くはない。はくらは、あまりにも速くを見てしまった。見えすぎるといえるのは、ときに、不幸なことかも知れぬ。

ギリシア神話の英雄、ヘルセウスは、見るものを石に化するというが、吉田喜重のハイ・キイな白っぽい面調にも似ている、『虚無』は見るものを生ける屍(少年の或る時期に死を決意し、試みてみたものの、結局、最終的な決断力の不足によって死ねないで20才の今日まで生きさらばえてしまっているはくら)に化する。

『また生き残ってしまった、私ひとり、もうハチだというのに(白昼の通り魔)』生ける屍にとって、せめてもできることは、死ねなかったという負債を引き受け、ただ死ぬまで(殺されるまで)生きるしかない。はくらは、あの時、何故に決断力がなかったのかわからない。だから、そこまで歩いて行こうと思う。

彼(はくの友人)は死によってしか、手に入れられないものだったのであると信じて逝ったのか、それとも、桜があまりにきれいだったから逝ったのか、それは残った(残された)はくらのあずかり知らぬところである。が、彼の心情はまことに痛々しく、哀切である。

吉本なら、彼に対しても『去年の死』のように言うのであろうが、はくには、もはや、敢えてそう言う程の責任は持ち合わせていない。

春4月バクリ残され花に散った、若い一人の青年に鎮魂歌として冒頭のパロディを歌う。

春3月縊り残され花に舞う